

## 家庭内事故 - その実態を探る

1999年6月4日  
国民生活センター

交通事故、労働災害、レジャー中の事故…。新聞やテレビに人身事故のニュースが登場しない日はないといってよいほど、われわれの日常には事故が多い。多くの人にとって、家庭はこのような事故の不安から開放されるやすらぎの場であるが、その家庭内で実は多くの事故が起きており、ときには命を落とすことさえあるということはあまり知られていない。

厚生省の「人口動態統計」によると家庭内における不慮の事故で死亡する人は年間1万人を超え、交通事故死よりわずかに少ないだけである。しかも乳幼児や高齢者においては、交通事故死より家庭内事故死のほうが多いのである。

協力病院から商品関連事故データを収集している国民生活センター危害情報システムにも多くの家庭内事故が報告されており、特に乳幼児の事故件数は突出している。

乳幼児や高齢者のような危険回避能力の劣る層に多く発生している家庭内事故を減少させるための方策を考えることは、少子・高齢化が進む社会にあつてますます重要となってくる。

このようなことから、国民生活センターでは、家庭内事故について1998年度から2年度にわたって特別調査として取り上げ、安全で安心して生活する上で広く問題の内在している分野を中心に事故防止策等について検討することとしている。

今回はその初年度として、既存の統計データから家庭内事故の実態を分析することとした。

### 〔家庭内事故とは〕

家庭内事故の一般的定義は必ずしも明確ではない。ここでは、以下を「家庭内事故」とした。

- ・ 人口動態統計からは…家庭における不慮の事故死
- ・ 危害情報システムでは…家庭（個人や家族が生活を営む住居。住宅内だけでなく、庭、門扉、塀などを含む）で発生した生命・身体に係る事故。階段・浴室・浴槽などの住宅構成材による事故のほか、家庭内で使用・利用されているその他の商品による事故も含めた。

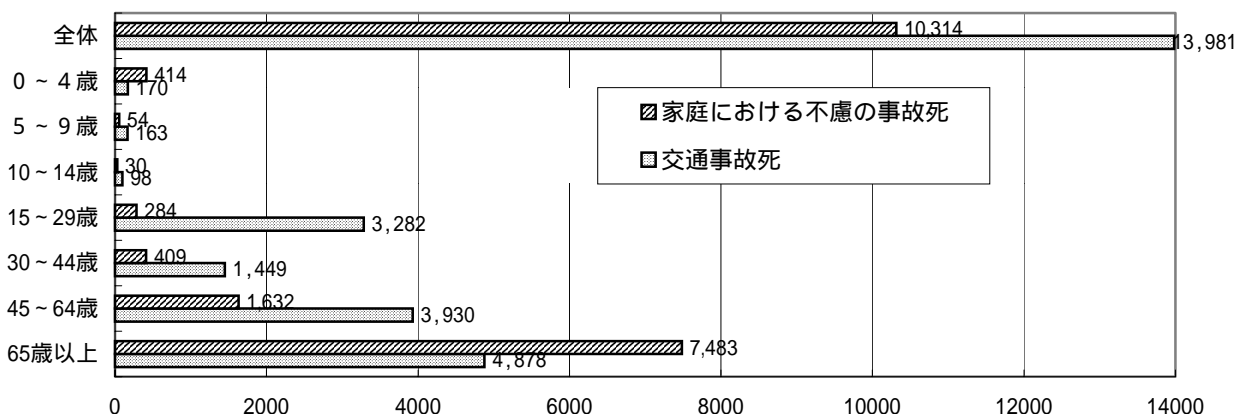
## 1.人口動態統計にみる家庭における不慮の事故死

### （1）乳幼児や高齢者の家庭における不慮の事故死は、交通事故死より多い

人口動態統計（厚生省）によれば、1997年における全死亡者数は913,402人で、そのうち家庭における不慮の事故死は10,314人である。交通事故死が13,981人であるから、家庭内事故死の数は交通事故死よりわずかに少ないだけである。しかも年齢別にみると、0～4歳（414人）、65歳以上（7,483人）では、交通事故死（それぞれ170人、4,878人）より多い。

交通事故は社会問題として声高く叫ばれているが、乳幼児や高齢者においては、交通事故死より家庭内事故死のほうが多いことに注目する必要がある。

図1 家庭における不慮の事故死と交通事故死(件数)



(2) 乳幼児の死因のなかで、家庭における不慮の事故死は2位

人口動態統計の「死因」によれば、15歳未満はどの年齢層においても、家庭における不慮の事故死は比較的上位である。なかでも1～4歳児においては、1位：先天奇形・変形及び染色体異常、2位：家庭における不慮の事故、3位：交通事故、4位：悪性新生物（いわゆるガン）であり、家庭における不慮の事故死はガンや交通事故による死より上位である。家庭内事故を減少させることは、国民の安全の向上に寄与することにつながるといえる。

(人口動態統計の死因の順位表では、家庭における不慮の事故、交通事故は明らかでなく、それらを含めて「不慮の事故」として記載されている。ここでは、別の表を参考に家庭における不慮の事故、交通事故を区分して順位を明らかにした。)

(3) 家庭内の不慮の事故死では「誤えんによる窒息」、「溺死・溺水」が多いが、階段等からの「転倒・転落」も多い

家庭における不慮の事故死のなかでは、「誤えんによる窒息」が32%、「溺死・溺水」が28%を占めて多いが、階段等からの「転倒・転落」によるものも多い(20%)。

表1 家庭における不慮の事故の種類別件数

事故の種類	件数	割合(%)
総数	10,314	100.0
転倒・転落	2,042	19.8
不慮の溺死・溺水	2,891	28.0
その他の不慮の窒息(誤えんによる)	3,271	31.7
煙・火災及び火災への暴露	1,222	11.8
熱及び高温物質との接触	160	1.6
有害物質による不慮の中毒・暴露	346	3.4

(4) 0歳では「誤えんによる窒息」、65歳以上では「溺死・溺水」の割合が高い

家庭における不慮の事故死を年齢層別にみると、65歳以上の高齢者は数が多いので、どの事故死の種類でも件数が多いが、0歳児においては「誤えんによる窒息」の割合が76%ときわめて高く、65～79歳では「溺死・溺水」が34%、80歳以上ではやはり「溺死・溺水」が30%と高い割合となっている。

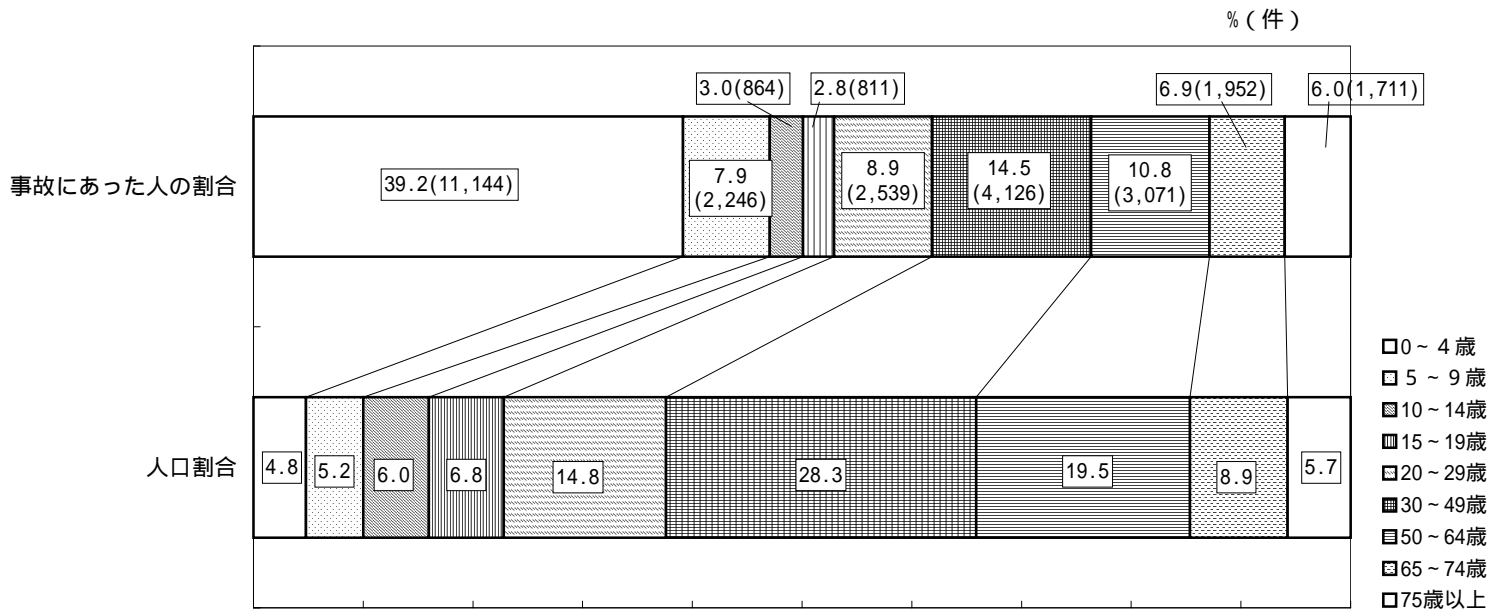
## 2. 危害情報システムにみる家庭内事故の実態と特徴

全国20の協力病院から国民生活センター危害情報システムに報告されている商品等による事故情報は、92年8月～98年12月で56,040件ある。このなかで家庭内事故は28,464件あり、51%（事故発生場所不明分を除くと56%）を占める。

### (1) 事故にあった人の年齢は0～4歳が突出している

事故にあった人の年齢を人口割合と比べると、人口割合では5%に満たない0～4歳の事故が39%と突出し、人口割合では28%を占める30～40歳代の事故が15%と比較的低い。65歳以上の高齢者の事故は13%で人口割合（15%）とそれほど変わらない。

図4 事故にあった人の年齢層別割合と人口割合



### (2) 低年齢層では男性、高齢者では女性が多い

家庭内事故全体では男性48%、女性52%で大きな差はないが、0～4歳では57%、5～9歳では60%と男の子が多くなる。男の子は女の子に比べて活動的な子が多いためであろう。

10歳以上では、年齢が上がるにつれ女性の割合が徐々に高くなり、15～19歳で女性が54%、男性46%で、女性が男性を上回るようになって、75歳以上の後期高齢者では69%が女性である。

### (3) 事故発生場所は「居間」、「台所」が多いが、「階段」も多い

事故発生場所が明らかなもののなかでは、「居間」が36%と最も多く、次いで「台所」が23%、以下、「階段」13%、「浴槽・風呂場」8%と続き、これらで全体の80%を占める。

これを外国（1例として、イギリス家庭内事故調査システム＝HASS）（\*1）の情報と比べると、わが国では「台所」、「浴室」の割合が高いのに対し、イギリスでは「庭」の割合が高く（HASSでは17%、危害情報システムでは7%）、住宅の構造や生活習慣の違いがうかがえる。なお、階段はほとんど差がない。

\*1：HASS（Home Accident Surveillance System）は、イギリス貿易産業省消費者安全部が行っている1976年に開始された家庭内における事故情報収集・調査システムである。今回、比較した1996年の報告書は、1996年1月から12月までの18病院からのデータをまとめたものである。

表2 外国との比較例(事故発生場所) (%)

	日本(危害情報システム)	イギリス(HASS)
居間	35.5	33.0
台所	22.7	15.1
階段	13.4	13.0
浴室	7.7	4.8
庭	7.2	17.2
玄関	4.3	2.3
ベランダ	1.0	-
洗面所	0.9	-
その他	7.2	14.6
合計	100.0	100.0

注) 割合(%)は不明を除いたものを100.0とした場合

HASSの分類は危害情報システムの分類と異なるが、後者の分類にあてはめて集計して作成

HASSの居間には寝室、ホール、ロビー含む、-の個所は集計できない項目、その他には屋根裏部屋、地下室、温室、車庫、納屋などを含む

(4) 事故の内容は「擦過傷・挫傷・打撲傷」が最も多く、「刺傷・切傷」「熱傷」と続く

事故の内容では、「擦過傷・挫傷・打撲傷」(32%)、「刺傷・切傷」(22%)、「熱傷」(20%)、「異物の侵入」(目、口、鼻などにものが入ってしまうこと)(12%)、「骨折」(7%)と続き、これら上位5位で全体の93%を占める。これらの事故の33%は転倒・転落がきっかけで起きている。

表3 けがの種類

けがの種類	件数	割合(%)
擦過傷・挫傷・打撲傷	9,200	32.3
刺傷・切傷	6,263	22.0
熱傷	5,555	19.5
異物の侵入	3,372	11.8
骨折	1,984	7.0
脱臼・捻挫	605	2.1
皮膚障害	534	1.9
その他の傷病及び諸症状	314	1.1
その他	637	2.0
合計	28,464	100.0

(5) 事故の程度は「軽症」が圧倒的に多いが、なかには「重症」の人、死亡した人も

「軽症」が87%と圧倒的に多いが、入院を要する状態である「中等症」が12%、生命に危険が及ぶ可能性が高い状態である「重症」が1%(28,464人中247人)もある。死亡した人も0.2%(同51人)おり、生命の危機が迫っている状態である「重篤症」の0.1%(同31人)を上回っている。

(6) 事故にかかわった商品等では階段が圧倒的に多く、次いで包丁、たばこ続く

階段が11%で、2番目に多い包丁(4%)と比べても断然多い。以下、たばこ(4%)、風呂場(4%)、いす(3%)と続くが、事故は家庭内のあらゆる商品等で起きている。

(7) 「軽症」から「重症」までは階段がそれぞれ第1位、「重篤症」「死亡」では浴槽がトップ

事故の程度別に事故にかかわった商品等をみると、「軽症」では階段、包丁、たばこ、「中等

症」では階段、なべ、やかん、「重症」では階段、浴槽、脚立が多い。「重篤症」は31件と少ないが、浴槽(10件)、はし(2件)、洋服(着火によるものなど2件)。「死亡」では51件中、浴槽(13件)、階段(9件)、めん・もち(6件)などがみられる。事故の程度が重いものでは階段、浴槽・風呂場などの家屋内設備(住宅構成材)の割合が高い。

#### (8) 事故にあった人の年齢からみた特徴は

全体的に「擦過傷・挫傷・打撲傷」が多いなかで、0~4歳児では、他の年齢層に比べ「異物の侵入」(24%)、「熱傷」(23%)の割合が高い。まだ歩けない0歳児では「異物の侵入」の割合が特に高い(42%)。65歳以上の高齢者では骨折の割合が高く(21%)、件数は少ないが「窒息」、「溺水」も多くなる。10歳から49歳までは「刺傷・切傷」が30%台で最も多いのが目につく。

全体では「軽症」が多いが、加齢とともに「中等症」「重症」の割合が高くなり、特に65歳以上の高齢者でその割合は高くなる。例えば、0~4歳では「軽症」が90%、「中等症」10%、「重症」が0.4%であるのに対し、65歳以上ではそれぞれ77%、20%、2%となる。「死亡」も高齢者が多く、特に75歳以上の後期高齢者では、1%(1,711人中19人)を占めて最も割合が高い。

事故にあった人の年齢別に事故にかかわった商品等をみると、0~4歳では、たばこ、階段、茶わん、いす、テーブル、65歳以上では、転倒・転落に結びつきやすい階段、脚立、床、玄関が多い。0~4歳、30~49歳を除けば、いずれの年齢層でも階段がトップである。30~49歳では包丁が第1位となり、階段、コップ、食用油と続き、調理に関連するものが多くみられる。

年齢層別にけがの部位をみると、0~4歳では「頭部」(23%)が最も多く、「腹部」(16%)が第2位と続く。しかし、0歳児に限ってみると「腹部」(29%)が「頭部」(19%)より多い。これは、たばこを誤飲し「腹部」にまで達したことと関連している。65歳以上の高齢者では乳幼児と同様に「頭部」(23%)が最も多いが、「大腿・下腿」(14%)、「胸部」(10%)、「腰部・臀部」(9%)も多い。15歳から49歳までは「手指」が26~30%あり、最も割合が高い。

### 3. 危害情報システムにみる住宅関連事故

階段、浴槽・風呂場、床・畳などの家屋内設備(住宅構成材)による事故は、家庭内事故の3割を占め、けがの程度も重いものが多いことなどから、それらを特に「住宅関連事故」としてまとめた。

#### (1) 階段の事故

階段の事故は、3,013件で家庭内事故の中で最も多く、家庭内事故の11%を占め、住宅関連事故の35%に及ぶ。また、家庭内事故の中で0歳(第3位)、30~49歳(第2位)以外のすべての年齢で第1位にランクされ、ほとんどの年代で飛び抜けて多い。

けがでは「擦過傷・挫傷・打撲傷」が多いが、「骨折」、「脱臼・捻挫」のほか、「筋・腱・血管の損傷」、「頭蓋内損傷」、「神経・脊髄の損傷」なども多く、後遺症の起きやすいけがが多い。けがの程度は、全体に「軽症」が多い中で「死亡」もみられる。(家庭内事故の「死亡」の18%を占め浴槽に次いで多い)

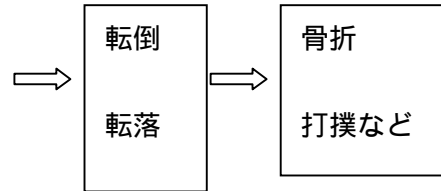
0~4歳の乳幼児では身体に比較して大きい「頭部」など首から上のけがが多く、65歳以上の高齢者では、「大腿・下腿」、「胸部」、「腰部・臀部」の割合が高くなる。

#### 事故に至るパターン等

「転落」(71%)や「転倒」(23%)とほとんどが転落・転倒によって事故に至っている。階段の上り下りのどちらで事故が起きたかをみると、それが明らかなものの中では、下りる時の事故が上り時の4倍を超える。

「階段に関連する事故」に至るパターン（例）

- 履いているものが滑り、つまずき
  - ・タイツ（滑り止めなし）が滑り
  - ・靴下に足を取られ
  - ・スリッパが滑り、スリッパにつまずき
  - ・ズボンのすそにひっかかり
- 大きいもの、重いものを運んでいて
  - ・ふとんを運んでいて
  - ・取り込んだ洗濯ものを抱えて
  - ・家具を運んでいて
- 階段が不具合等で
  - ・階段が急勾配で足を踏み外して
  - ・階段の手すりが折れ
  - ・階段の滑り止めにつまずいて
- 幼児が歩行器等に乗っていて
  - ・子ども用自転車、バイクに乗って車ごと落下
  - ・歩行器に乗っていて歩行器ごと落下
- 照明不十分
  - ・夜暗くて
  - ・昼間でも暗くて



（主な事例）

- ・自宅の階段にワックスをかけた直後、階段を上っていて滑って、目と眉毛の間を打った。  
(5歳 男児)
- ・掃除機を持って2階に上がろうとして、階段の上から3段目ぐらいから掃除機を持ったまま落ちた。靴下が滑りやすいものだったと思う。  
(30歳 女性)
- ・2階で寝るため、階段の手すりにつかまって自宅の階段を上っていたらもう1段で最上階というところで手すりが折れて階段から転落、落差は約3メートルあり、腰を打った。  
(81歳 男性)
- ・2階で子どもが乗り物の玩具に乗っていたが、玄関の呼び鈴に反応して部屋から出て、乗り物ごと階段を転落し、おでこ・鼻の下・右目横を打撲した。  
(1歳 男児)
- ・暗いのに電気をつけずに踏むところが狭い階段を両手に洗濯物を持って下りるとき、6段くらい滑って落ちた。足首や親指の付け根やひじが擦り傷となり、小指と背中を打撲した。  
(43歳 女性)

（2）浴室（風呂場・浴槽・シャワー）の事故

浴室の事故は合わせて1,319件と住宅関連事故では階段に次いで多く、家庭内事故の5%、住宅関連事故の16%を占める。

事故にあった人では4歳以下の乳幼児が29%、次いで65歳以上の高齢者が21%を占める。性別は男性、女性でそれほど差はないが、5歳から14歳では男性が女性の2倍、50歳以上では逆に女性は男性の2倍となる。

浴室では「擦過傷・挫傷・打撲傷」も多いが、「刺傷・切傷」、「熱傷」も多い。

けがの程度では、浴槽が家庭内事故の中でも「重篤症」「死亡」で第1位となっており、浴室での死亡事故18件を含む「重症」以上（64件）は家庭内事故の20%に及んでいる。

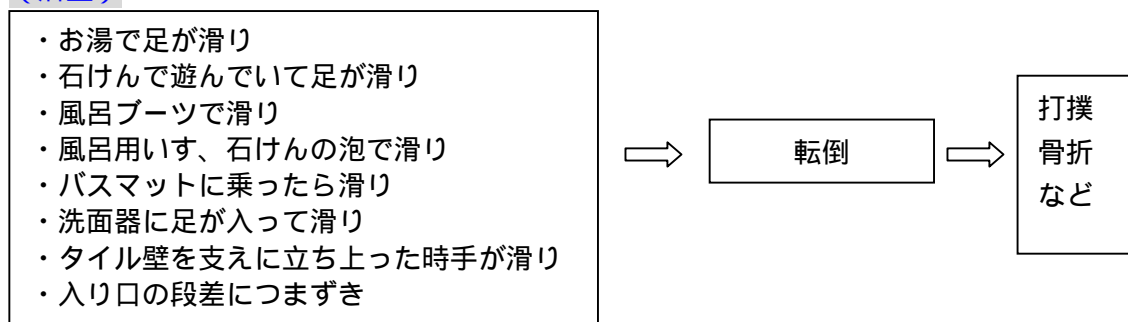
また、家庭内の「溺水」の84%（31件）が浴室で起きており、このうちの32%は死亡事故（10件）である。浴室は最も危険の高いところである。

事故に至るパターン等

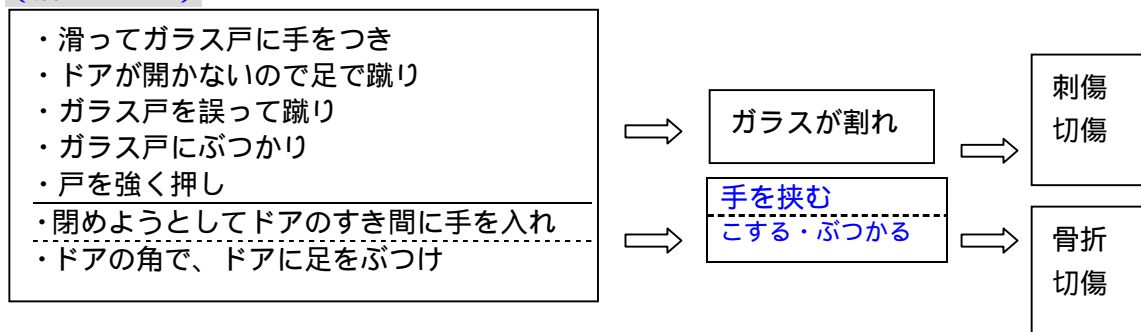
事故のきっかけには、「転倒」や「ぶつかる」が多いが、浴槽に落ちる「転落」の例もある。浴室には(ア)溺れるほどの深さに水が張ってある、(イ)熱源や熱湯がある、(ウ)ガス漏れや不完全燃焼の発生、(エ)滑りやすいプラスチックの床に加えてお湯や石けんを使う、(オ)タイルなど硬い床、(カ)ドアにガラスが使われていたり、また、裸の無防備な状態で利用するなど危険性を高める要素が多い。

「風呂場・浴槽・シャワーに関連する事故」に至るパターン（例）

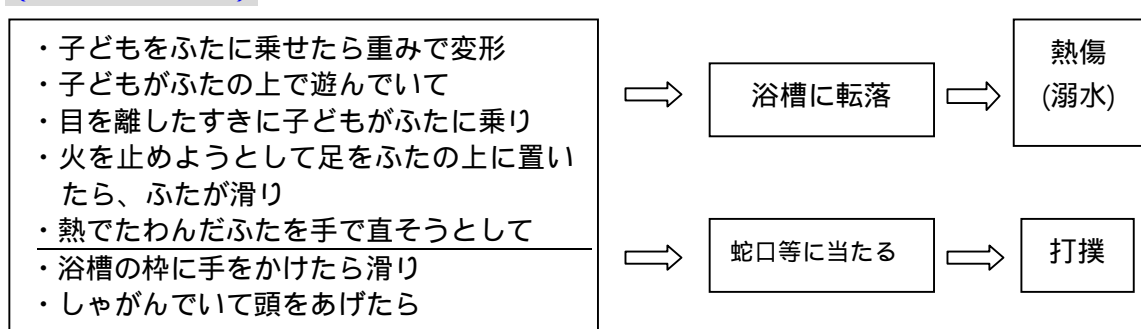
（浴室）



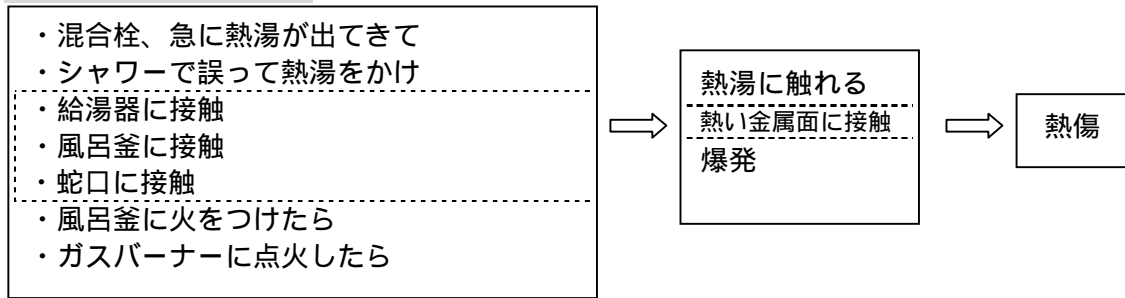
（浴室のドア）



（風呂ふた・浴槽）



### (風呂釜・シャワー等)



### (付属物)



### (主な事例)

- ・浴室で足を濡らさないように使用するプラスチック製の風呂ブーツを履き洗濯していたところ、滑って足をひどく脱臼してしまった。底についている滑り止めのゴムが水気を帯びると滑りやすくなる。タイル地の浴室はよけい滑りやすい。素足だったらこんなことにならなかった。  
(29歳 女性)
- ・風呂場の窓を閉めようとして、浴槽のふたに乗り誤って湯の中に転落して足にやけどをし、入院した。  
(8歳 女子)
- ・シャワーを浴びていたところ、急に熱湯が出たため、左大腿部にやけどをした。(21歳 男性)

### (3) 床・畳・敷居の事故

床・畳・敷居による事故は908件あり、家庭内事故全体の3%、住宅関連事故の11%を占める。住宅関連事故の中では階段、浴室(風呂場・浴槽・シャワー)に次いで多く、その81%が転倒によるものである。

事故にあった人では、65歳以上の高齢者が最も多く39%を占めるが、このうちの78%が女性で、高齢者の女性は男性の3.5倍に相当する。

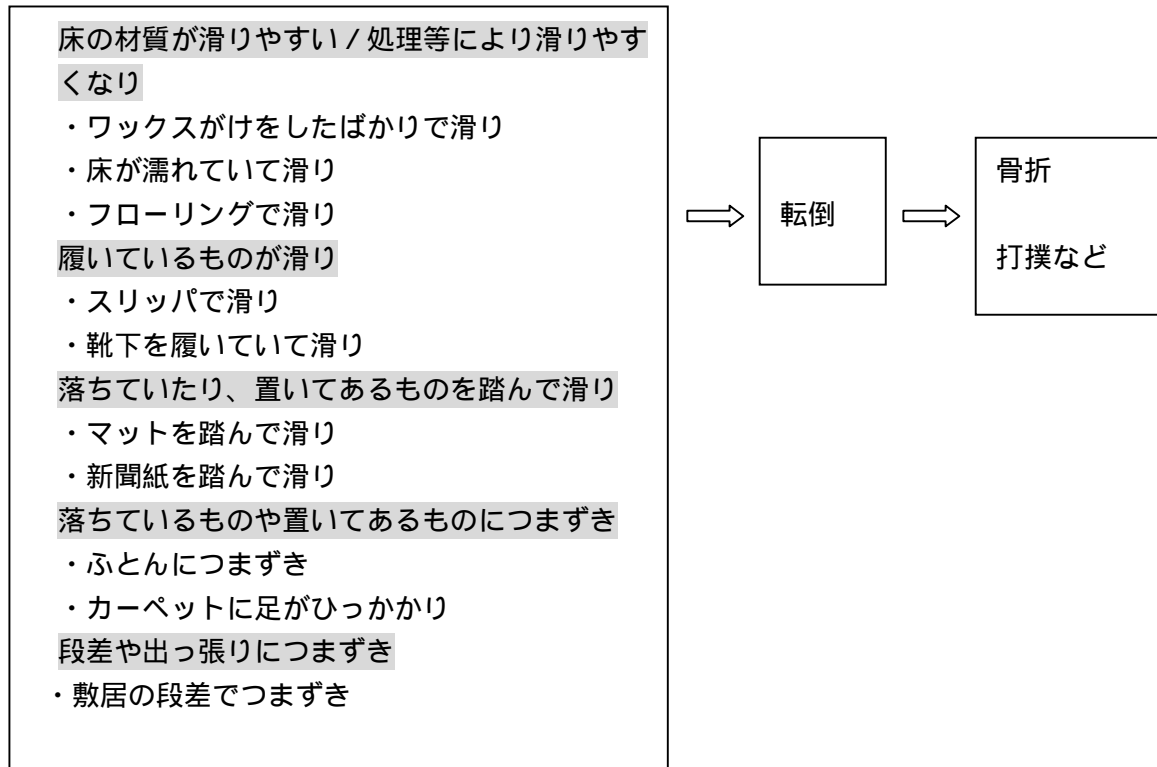
けがは「擦過傷・挫傷・打撲傷」が60%と最も多いが、「骨折」も多く住宅関連事故の中では階段に次いでいる。「骨折」のうち70%は65歳以上の高齢者の事故である。

また、乳幼児は件数は多いものの「軽症」の割合が高いが、50歳以上になると「中等症」以上の件数が増え、高齢者の場合は31%が「中等症」以上のけがになっている。

#### 事故に至るパターン等

転倒した時の状況が明らかな258件のうち、滑ったものが137件、つまずいたものが113件とこれらが飛び抜けて多く、よろめくなど身体のバランスを崩したものが9件あった。滑るケースでは、床が濡れていたりワックスで磨いていたり、また、置いてある新聞紙等に乗ってしまって滑ってしまうなどがみられる。つまずいたもののうち、半数以上の60件は敷居であり、敷居のわずかな段差がつまずきの原因とみられる。

「床・敷居・畳に関連する事故」に至るパターン（例）



（主な事例）

- ・新築の自宅の居間で床をワックスがけをしていたために、足が滑り転倒し、腕を骨折した（ソックスを履いていた）（58歳 女性）
- ・畳の上に置いてある新聞を踏んで滑り、転倒したところに文庫本が重ねて置いてあったため左側胸部を打撲した。（67歳 女性）
- ・自宅でベッドから降り台所へ行く途中、居間で敷いてあるふとんにつまずいて転び、畳に右手をつき薬指を骨折した。（66歳 男性）
- ・朝、急いでいて洗面所の敷居につまずいて転倒し、右ひざを捻挫した。（23歳 女性）

（４）玄関の事故

玄関の事故は337件あり、家庭内事故の1%、住宅関連事故の4%を占め多くはない。

事故にあった人の中で、乳幼児の割合は21%と他の家屋内設備（住宅構成材）に比べてそれほど高くはなく、高齢者の割合が40%とトイレに次いで高い。

けがの内容では、「擦過傷・挫傷・打撲傷」が57%と最も多いが、次いで「骨折」が23%あり、「骨折」の割合は家屋内設備（住宅構成材）の中で最も高い。

事故に至るパターン等

玄関は履き物の着脱をする場所であり、段差があるところで、不安定な姿勢を取る場所である。そのため、転倒が82%と家屋内設備の中で最も高い。転倒の状況が明らかでない117件のうち、多くはつまずく（59件）と滑る（42件）ためであり、次いで踏み外す（14件）と続く。そのほか、段差からの転落、ドアや引き戸等にぶつかったり挟まれる事故もある。転倒して耐水性のあるコンクリートやタイル、石などに覆われた硬い面にぶつかることも多く、入院事故の割合も11%と比較的高い。

(主な事例)

- ・明かりをつけず玄関の段を下りていて足を踏み外し、捻挫を負う。 (55歳 女性)
- ・自宅の玄関に上がろうとして足を滑らせて転倒し、後方へ倒れ左大腿骨を骨折した。 (83歳 女性)
- ・外出しようと自宅の下駄箱から靴を取り出そうとして前に転倒、左ひざ、右肩、頭部を打撲した。 (83歳 女性)

家庭内事故の防止に向けて

以上みてきたように、家庭内事故は、乳幼児や高齢者に多く発生しているのが最大の特徴である。しかも乳幼児や高齢者の家庭における死亡事故は、社会問題化している交通事故死より多いことにまず注意する必要がある。

家庭内で事故の起きている場所は、「居間」「台所」が多いが、「階段」「浴槽・風呂場」も多い。家庭内事故のうち、「階段」「浴槽・風呂場」などの住宅関連事故は3割を占め、その他の商品と比べけがの程度が重いものが多く、高齢者の事故の割合が高いことがその特徴としてあげられる。

家庭内で思わぬ事故にあうのは、家の中は安全なはずという思い込みと、自分の家のことは長年暮らしているので何もかも熟知している、したがって、まさか事故に遭うなどとは夢にも考えていないからではないか。その結果、安全に対する配慮をおろそかにしている、ことなどもその背景として考えられる。しかし、日常の生活の場で事故は起きている。

一般の家庭、特に乳幼児や高齢者のいる家庭では、まずはこのような家庭内事故の実態を認識し、日ごろから事故にあわないよう配慮してほしい。

今後、社会の少子・高齢化が進む中、このような事故の未然防止対策を考えることはきわめて重要である。関係者の事故防止に向けた対策を望むものであるが、当センターにおいては、この1999年3月に完成した「家庭内事故解析棟」を有効に活用し、その問題解決に向けての方策を検討することとしている。

本件連絡先：消費者情報部危害情報担当 ( 03 - 3443 - 1793 )

<title>家庭内事故に関する調査報告書 家庭内事故 - その実態を探る</title>